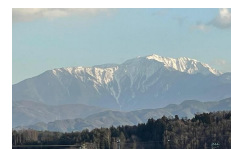


ああ 遠くの空は 晴れている



NO18

南箕輪村教育委員会

「温かい学級づくりのこつとは？」

南箕輪村 教育委員会

教育相談員 加藤 敬一

私は、長野県教育委員会の委嘱を受け、「学級づくり支援員」として、4年間、県下各地の小中学校に招聘され研修会講師を務めていました。今回は、その立場で記したいと思います。

理想的な学級とはどんな集団でしょうか？

私が新卒の頃は、「自由と規律が両立している学級」と先輩に教わるが多かったです。現在では、現早稲田大学大学院教授の河村茂雄先生が開発された「Q - U (Questionnaire - Utilities)」：児童生徒の学校生活における満足度や意欲、クラス内の人間関係を測定する心理検査によりますと、「理想の学級とはリレーションとルールが成立している集団」となります。リレーションとは親和性つまり、「誰とでも仲良くできること」です。

ルールとは単なるきまりではなく「人を傷つけない・自分の責任を果たす等のマナーやスキルが成立していること」です。この二軸が成立している学級を「多くの子どもがその集団に所属していることに満足し意欲的に活動している」という意味で「満足型の集団」と河村先生は名づけ、これを目指すべき学級集団と定義されました。



では、この二軸はどのような関係性をもつのでしょうか。それを示す事例を二つ紹介します。

1 警察沙汰を起こしてしまうような中3のA君。

しかし、自分の学級にいる時には全く問題を起こしませんでした。私は、担任に頼んで理由をA君に聞いてもらいました。するとA君は「このクラスの連中は俺に良くしてくれる。そんなダチには迷惑をかけられねえ。」と答えたとのことでした。

リレーションが成立している学級集団だからこそ、彼はルールを守ろうとしたのです。同時に自分自身も友達とのリレーションを大切にしてクラスではじめ(ルール)をつけた生活を送れたのでしょう。

2 発達特性のある小4のB君。

給食当番をやったことがありません。ある日、B君は給食着を着ないで、牛乳を友達の机の上に配りました。その時のクラスメートたちは、「B君が給食当番をやってくれたよ！！」と喜んで拍手をしたようです。

日頃から、友達の成長を温かく見る目(リレーション)があったからこそ、B君は自分の責任を果たそうとする姿(ルール)につながったのでしょう。

この二例からおわかりだと思いますが、ルールの根本にはリレーションが土台として存在していることが必要です。授業参観をすると、その学級集団にリレーションが存在しているかどうかは、一目でわかります。リレーションが成立している学級は、友達を見るまなざしが温かいからです。

学級集団とは、その個性や能力の違い・成育歴・環境の違いなどを考えると一つの国家と言ってもいい集団だと思われまふ。特に小中学校の集団はそういった質的な側面があると考えています。その様々な個性が互いに温かなまなざしを向け合うにはある種のスキルが必要となります。



それはずばり「相手の良いところを見つけるスキル」です。

このスキルは、その子が大人になっても社会生活を営む上で重要なスキルになります。このスキルがあれば、人間関係を良好に保てるという意味では、その子が生きる上での「宝」とも言えます。家庭でも職場でも人間関係が幸せを築く礎（いしずえ）となるからです。

では、その「宝」を子どもが身に付けるにはどうしたらよいか？

まず、担任の先生が児童生徒一人ひとりの良いところ、成長したところ、その子にしかない個性を肯定的に認めてわかりやすく本人や周囲に伝えていくことです。

すると、それをリフ্রেーム（視点）モデルとして子ども達は友達を見るようになります。その後は、友達を温かく見る姿勢を言葉で伝えたり、文字で可視化したりして互いに認め合う場面を増やしていきます。必ず温かな雰囲気生まれます。

ここに、温かい学級づくりの要諦（ようてい）があります。

今、世界情勢は不穏です。そんな昨今だからこそ、小さな国家といえる学級が、温かく互いを認め合える集団となることには、大きな意義があるのではないのでしょうか。

